
～第五次聖杯戦争後日録～

式蜂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～第五次聖杯戦争後日録～

【Nコード】

N0943V

【作者名】

式蜂

【あらすじ】

三人を結びつけるのは聖杯戦争。それぞれが罪を持ち、心に傷を負う。そんな三人の生活が『元に』戻るまで。そんなお話。

予告編（前書き）

※ 注意 ※

この作品はF a t e／s t a y n i g h tのネタバレを多く含みます。

F a t e未プレイ、プレイ中の方は読むのはオススメできません。それでも読むんだったら自己責任でお願いします。

一応説明等も入れていく予定ですが、矛盾点などがありましたら理由込みで指摘お願いします。

予告編

予告編

『少年』が己の決断故に、

「なん……だよ、これ………
………え？」

支払った代償は、

「……………いりやっ!？」

——重く押し掛かり。

「んじゃあ……………
………行ってくるわね」

姉は己の選択故に、

「とおさか……っ!」

犯した失敗を、

「大丈夫よ、すぐ帰るから。

それと………」

桜の事、お願いね」

——思い切ることが出来ず。

妹は己の存在故に、

「ねえ、イリヤちゃん。

……先輩は、何処？」

「え………」

罪の意識に苛まれ、

「……先輩は、何処？
何処行っちゃったの……？」

——現世で夢と踊り狂う。

三人を結びつけるは聖杯戦争。

それぞれが罪を持ち、

心に傷を持つ。

そんな三人の生活が、

『元』に戻るまで。

そんなお話。

〈第五次聖杯戦争後日録〉

近日公開予定

「ねえ、お譲ちゃん……………
オジサンと、さ……………
イイコトしない……………」

「…………嘘だろオイ…………」

……To be continued?

予告編（後書き）

目を通してくださった方
ありがとうございます

筆者、になろうとしてる式蜂です

まだ予告編のみですが、近い内に本編を投稿する予定です

「士郎子モノ」です

士郎子、といえば同人誌のボブJrさんが有名ですね

あちらはギャグ多め、士郎子は士郎子のままですが、自分の小説は
原作に沿う形を模索していきます

未熟故、拙い文章ではありますが、本編が皆様の興味に合うもので
あれば幸いです

本編更新まで暫くお待ちください

第一話

魔法使い。

その手を以て奇跡を起こす者の総称。

その資格好、呼称される基準も様々である。

例えば、見事な手品を披露するマジシャンは、子供達に喜ばれ、こう呼ばれるであろう。

「すごい、まるで『魔法使い』みたいだ」と。

が、彼らや彼女ら（マジシャン）も普通の人間である。

アニメや漫画のように魔力とやらを使って手品を披露しているわけではない。

手品には必ずトリックが存在するのだ。

そのトリックを如何にして客へバレないように行使し、騙すのが手品。

勿論、客も何かしらトリックがあることを承知の上で手品を見る。

しかしトリックに気付かず騙され、驚き興奮し、首を傾げこう呟くのだ。

「奴は『魔術師』なのか」と。

魔法使い。魔術師。

魔力という摩訶不思議な力を使い、四象を操る者達。

動物と会話し、使い魔を従え、人々に助言を言い渡す。

かと思えば、時には怪しげな薬で人を惑わし、その絶大なる力をして都市一つを滅ぼす。

……など、善悪の判断がしづらい存在。

しかしその存在はあやふやで、一応資料は残っているものの、真贋は定かではなく、結果アニメや漫画など空想的なモノとされることがしばしば。

魔道書、魔道具なども残っているが魔力の無い人が使いこなせるわけでもなく、アンティーク品扱いされる物もある。

子供の夢なら笑って許せるものの、大人になってまで目指すなど以外の外。

その名を名乗る者など即座に既知外、社会不適合者の烙印を押されてしまうであろう。

……そう、人々は『その存在』を信じてはいないのだ。

それ故に、「〇〇の魔術師」「〇〇の魔法使い」と、気軽に使えたりするのだ。

しかし人々は知らない。

『その存在』に関した、秘匿・隠蔽されている情報があることを。

この世に数多の魔術師が存在し、今なおも日常生活を送っていること。

片手ほどながらも、魔術師の最上位でもある魔法使いが存在する
とである。

今回は、彼ら、彼女らの中でも有名な話となっている、とある『儀
式』に関する話をしよう……

極東の島国、日本。

その国のとある地に、今回の舞台となる冬木市がある。
周囲を山と海に囲まれた、自然豊かな地方都市だ。

『冬木』という地名は、冬が長いことから来っているとされている。
が、実際は温暖な気候で、そう厳しい寒さに襲われることは無い。

冬木氏は中央の未遠川を隔てて2つに分かれている。
西側に深山町、東側に新都、となっている。

——西側、深山町。

ここは古くからの町並みを残す住宅街が多く目に入る。
そこへ合わさるように、学校、商店街、海浜公園など、人の営みに
関する建物も見受けられる。

主人公宅である『衛宮邸』は少し町外れに位置している。郊外には柳洞寺、外国人が周りの森全体を買って建てた『城』がある。

夜になれば住宅から漏れる光、電柱に備え付けられた街灯が夜道を照らす、郊外となると住宅と共に街灯も減るため、深夜出歩くのはあまりお勧め出来ない。

新都と比べたのなら多少治安は良いと言えよう。

——東側、新都。

こちらは高層ビルなど、大きな建築物が目立つ。

駅、ショッピングモール、繁華街の他にも映画館、巨大レジャープールなど、娯楽施設も建設されている。

郊外には教会、これまた外国人が建てた洋館……通称『幽霊洋館』なるモノがある。

平日は会社員、OLなどが行き交い、週末・祝日となるとショッピングやデートなど、老若男女入り混じり賑わうこととなる。

こちらは深山町とは違い、発展しているように見える。

が、昼は人が多いものの、夜になるとほとんどの人が自宅のある深山町へと戻る。

そのため人通りは少なくなり、警察という治安維持機関がある、故に夜が安全である、とは言い難くなってしまう。
所謂『ドーナツ化現象』が懸念されるであろう。

この2つは冬木大橋で繋がれ、橋は人々の交通手段として、大いに

役立っている。

そして周りに山がそびえ、北に海がある。

こう見てしまえば至極普通の街、と思うであろう。

しかし、そんな普通の街にも、

『異常』は起こり得るのだ。

実は新都にも、『冬木中央公園』という公園がある。駅前から少し離れた、草木茂る広めの自然公園となっている。

しかし、過去にこの場で起きた出来事と独特な雰囲気故に、人はあまり寄り付かない。

人を寄り付かせぬ『出来事』とは何なのか？

その『雰囲気』の原因とは一体何なのか？

少年少女に過酷な選択を迫り、心に傷を負わせ――

――そして拭えぬ罪を背負わせた『モノ』とは？

それこそ、今回の話が綴られる、最たる理由とも言えるであろう。

それは．．．．

~~~~~

(ここで終わっているようだ)

．．． i n t e r l u d e o u t

深山町、柳洞寺の裏手。

そこには山の中に出来た遊歩道や霊園の他に、水の澄んだ池が広がっている。

池の水面には四季折々の風景が写し出され、訪れる者の目を楽しませるであろう。

その池を下った斜面に、湧き水が流れている場所がある。

しかし、『ある』といってもそこへたどり着くには道なき道を進む必要がある。

もしたどり着いたとしても、ただ湧き水が流れているだけの殺風景な場所のため、人によっては骨折り損のなんとやらで終わってしま

うであろう。

……その人が、世に言う  
『一般人』ならば。

???  
side

黒。

墨よりも漆よりも暗いその色が、視界全てを埋めていた。

それもそのはず、自分は真っ暗闇の洞窟内で、仰向けで倒れているからだ。

「……………」

目が覚めて暫く経つ。

俺は、凜とライダーと共に洞窟へ入り、黒化したセイバーと決着をつけ、桜を救って、言峰との殴り合いを果たし――

そこから、何も思い出せないでいた。  
いかにして聖杯を停止、もしくは破壊したのか、全く覚えていないのだ。

凜、桜は無事なのだろうか――

このままでいても何も進まないだろうし、そろそろ体を起こすことにする。

正直、岩が頭に擦れ痛くなってきた。

横を見たときに目に入った体のすぐ近くにある糸みたいなものも気になる。

まず軽く足を上げ降ろす反動を利用し、それと同時に腹筋へ力を入れ、上半身を起こそうとする。

始めは体が言うことを聞かず、上手くはいかなかったが、数回後、どうにか起こすことが出来た。

が、彼……もとい『彼女』の目に入っただのは、全く予想に反したモノであった。

体はシャツで下半身を隠せるほど子供のように縮み、胸が妙に膨らんでいて、糸のように見えたのは頭髪であり、赤錆色とはかけ離れた白色になっていた。

「……………なんだよ、これ……………」

……………え？」

そう、彼の体は第三魔法

『魂の物質化』

により――



「……………いりやつ!?!」

義姉である、イリヤことイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの体へと変貌を遂げていたのである。

## 第一話（後書き）

読了、ありがとうございます。

なんとか更新、です。

……の割にはホントに寂しい内容。  
小生遅筆なので勘弁を。

タグに「不定期更新」を追加しよう……。

次回更新まで暫くお待ちください。

## 第二話

### 凜 side

私は桜を闇から救い出そうとは微塵も考えなかった。

黒に染まった桜は、まるで癩癩が爆発した子供のようなだった。

負の感情を制御すべき身であるにも関わらず、感情に身を任せ己を殺し、遂には自らの悲運不幸を糧に殺害を続けた。<sup>破壊</sup>

さらに一般人のみならず、義兄をその手につけ殺害。

あまつさえアーチャー・ライダー以外のサーヴァントを吸収し、士郎の左腕まで持っていた。

これだけの被害を受けているにも関わらず、士郎は「桜の味方になる」と発言をし、彼女を救うと断言。

彼曰く「俺がもっと早く気付けはよかったんだ」と。

正義の味方候補らしいとんだ加害妄想だが、もし救えたとしても、その罪は決して取り除かれず、死ぬまで食い込み続け、彼女を永劫苦しめる。

救いを与えようとする彼と違い、私は彼女を危険と判断し、洞窟へ向かう前に殺害を前提で算段を立てた。

真っ向からの戦いで敵わないことは承知の上。

それを覆す為に、私はとある礼装を準備した。

大師父が後世に遺した宿題であり、イリヤの『初代』から引き継いできた記憶を元に、士郎が苦辛の未完成させた投影物中の傑作。

その名も、宝石剣ゼルレツチ。

彼の『魔法使い』が製作した魔術礼装である。

推測ではあったが、最大魔力行使量は私と桜は同等。

アンリ・マユ

この世全ての悪とパイプを繋げた桜は魔力量が桁外れになっているものの、最大魔力行使量の増加まではされていないはず。

この世全ての悪からの無尽蔵な供給が叶えられているものの、それを最大限に利用する手立ては彼女には無い、ということだ。

いくら大きな給水ポンプがあったとしても、それを撒いたりするものが柄杓では意味が無い、ということだ。

ならば問題は単純な力の差、魔力量になる。

その問題を帳消しにしてくれるのが、魔術礼装・宝石剣ゼルレッチだった。

魔術礼装は種類が二つに別れる。

一つは持ち主の魔力量を増幅させたり、魔術行使を補佐するもの。

もう一つはそれ自体が特殊な魔術を行使できたりするもの。

前者を「補助礼装」、後者を「限定礼装」と呼ぶ。

宝石剣ゼルレッチは後者の類いに入る。

では、宝石剣ゼルレッチの持つ、私と桜の差を埋める『特殊な魔術』とは一体何なのか？

宝石剣ゼルレッチ。

この剣が持つ能力は、平行世界に小さな穴を穿ち、その穴から別世界に存在する空気中にある魔力を収集すること。

それだけに限らず、その収集した魔力を斬撃として放つことも可能。

桜はこの世全ての悪が魂を元に魔力を作り出す永久機関。

こっちは合わせ鏡の如く無限に連なる平行世界からいくらでも魔力を捻り出すことが出来る。

あっちは無尽蔵。

こっちは無制限、ってわけだ。

しかも少ない魔力消費で桜の影に対抗出来るからリーズナブル。

……一振りするたびに腕の筋繊維が一本一本断裂していく代償は中々に痛かったけど。

そしてこちらの独壇場に持ち込み、隙を窺い背中に隠したナイフで心臓を一突きに――

この計画を胸中に、洞窟の中、大聖杯への道中、私は士郎に宝石剣を作ってくれた理由を、そしてライダーの居る場で自分は桜を殺す気にいる旨も伝えた。

彼は桜を救うのなら一人より二人の方が確實、あと遠坂私との約束を守る為だ、と答えた。

ライダーは無言で、表情からも窺い知れなかったが、概ね士郎と同じ意見だったのだろう。

私は「律儀ね」と生返事し、背中に当たる隠した短剣の感触を感じつつ、前に進んだ。

途中、黒化したセイバーに遭遇するが、桜からの指図なのか私は通ることを許された。

セイバーの柔らかく淑女らしい雰囲気は一切残らず、その身は士郎とライダーへの純粋な殺意を黒の鎧と共に纏って、歪で禍々しい空気を生み出していた。

今更ながらこんな風になった桜を「叱り」にいくのか、と考えてしまい、冷や汗が流れ、宝石剣を握る手に力を込めた。

得てして私は難なく奥に進み、そして洞窟の最奥、大聖杯にて桜と対峙した。

しかし時既に遅く、彼女は既に義父を手につけ、自由の身となっていた。

彼女を統括制御する存在が、この世に居なくなってしまったのだ。ストッパーを外された彼女は、もはやただの大量殺戮兵器に他ならない。

解放された桜は私の存在など軽く搾取するかのような勢いで巨人じみた「影」を私に差し向ける。

しかし、「影」は宝石剣から放たれる光に体を打ち抜かれ、朽ち消えていく。

あとは、私の描いた筋道通りとなった。

その光は「影」のみに限らず、洞窟内の壁にまで到り、小規模な地震を起こしつつ洞窟を崩壊へと導いていく。

魔術に関して素人なことも手伝ってかその絶大な威力、異質さに動揺する桜は、私が種明かしをするまでこの剣を理解出来ず、窮地に追い込まれていった。

腕の筋肉繊維が一本一本断絶していく痛みからか滲み出てくる脂汗を隠しつつ腕を振るい、壁じみた岩を踏破し、種明かしが終わる頃にはあれだけ離れていた桜の真正面に、私は立っていた。

桜は、自らの戦略では叶わないことを察したのか、同情を請うような独白をしてきたが、私はそれを否定した。

そして、彼女の私に対する認識を「姉」から「敵」と変えさせ、ここに覚悟を決めた。

（あとは、止めを刺すだけ）

元は遠坂家であつたとはいえ、今では桜は間洞家身内の者。  
彼女を、世界を破滅に導く根源となる者を殺すことには抵抗はなかつた。

世界を十とし、九が生き残るには、一の犠牲を、と。  
彼女には、一切「姉」としての優しさを見せる積もりは無かつた。

たとえば彼女の頭に  
結つてあるリボンへ  
思い入れがあつたとしても。

そして私は決着を付けにいった。

まず桜に宝石剣を投げつけ、崩壊させる。

高度な魔術品である故に、膨大な魔力を込めた宝石剣。  
爆散したそれは周囲の「影」を光によって打ち消すとともに、閃光を生み出す。

桜はこちらの切り札をいきなり投げつけられ、その後の閃光により  
目が眩み、私の行動を把握出来なかつただろう。

突然の閃光には怯み、身動きが取れなくなるという、戦闘経験が無い者特有の隙を突いたのだ。

その隙を見逃さず、スプリントで彼我の距離を一気に詰め、背中に  
隠した短剣を抜く。

運動神経は良いし、脚の速さには自信がある。

肋骨の隙間に入るよう刃を横に、そして構えを心臓に一直線の突きとする。

ようやくこちらを認識したのか目を合わせてきた桜の手前、彼女の胸に意識を集中させる。脊髄反射、所謂直感レベルでなければ回避不可能な隙、詰みであった。

（――殺<sup>と</sup>った）

そう、確信した。

しかし、それと同時に、

（――あ、ダメだこれ）

と、直感してしまった。

そして彼女を抱き締めた時、既に私の腹部には風穴が開いていた。



咄嗟の反撃を桜が行使、武器を突き出さなかった私に直撃し、その場所から衣服と同じ赤いモノが溢れて、色々なモノを外へ流していく。

それに構わず私は彼女を包み、桜の頭に付いてる私のリボンを眺め、大気を肺へ押し込み、喉から吐き出し音とする。

その口が伝えること、この腕で桜を優しく抱きしめてあげることは、私の人生では最初で最後になるだろう。

桜の顔は見えなかったけど、硬直したまま、ただ抱かれたまま私の言葉を聴いていた。

桜に伝えた内容はおぼろげで、段々と体から力が抜けていくのを感じた。

そして四肢が弛緩し、視界が横に流れて、地面が近づく。

意識が薄れていく中、私は彼女に自らの胸に秘めた思いを伝える事が出来て満足した。

要約するなら

——よく頑張ったわね、と。

あれだけ綿密に練っていた計画も、これで御破算、全て無意味。

一番大事な場所で失敗をするなんて、やはり「うっかり」の血筋は争えない。

紆余曲折あったものの、私は桜を殺せず、士郎の持論に沿う形に終

わった。

結局自分で身内の決着を付けられず、士郎達が来るまでの時間稼ぎになってしまった。

こんな冗談めいた死に方では御先祖、父母に会わせる顔が無い。

結局、私こと遠坂凜はまだ尻の青い魔術師であった。

（リボンの交換は出来ず仕舞いかあ……）

自嘲しようにも、最早自分が瞼の開き閉じすら分からなくなって、全ての音が遠のいていく。

夥しい出血と、欠損した肉体を必死に復旧しようと、代々受け継いできた右腕の魔術刻印が躍起になる。

何を今更、と呆れ半分に嫌味を覚えつつ、湧き出る睡眠欲に身を委ねていった。

……最後に、桜の声が聞こえた気がした。

そして視界が暗転して――

——腹部からの痛みにより目を覚ました。

「……………」

腹部では痛みが熱と共に自己出張を未だ続けている。

まだ焦点の合わない目で周りを見ると、どうやら自分は広い部屋の壁に寄りかかっているらしい。

まだ眠り足りないのか疲れが酷く、少し姿勢を変えようと腕を動かそうとしたが全く動かない。

仕方なく身動きで良い具合にした後、何度か瞬きを繰り返し、ここが衛宮邸の一室であることを認識する。

庭に面しているのか、肌寒さからつと自らの体を見ると、自分の衣服が上半身のみ剥がされ、下着以外何も付けていないことに気付き、慌てて周りを見渡す。

……どうやらここには人が、特に士郎<sup>男</sup>が居ないと分かって何故か落ち着いた。

伸ばしている足元を見れば、誰かが血を拭ってくれたのか生地の色を赤一色に染めたタオルが数枚落ちている。

胴に風穴が開き、それ相応の血が流れ出ていただろうが、服に付いたもの以外は粗方拭われていた。

……もし男だったら記憶修正は必須ね。

などと戯言を浮かべつつ、無防備な我が身と冬の理不尽な寒さに焦らされながら、今一度体の状況を確認する。

腹部の痛みと熱、動かない腕、多大な疲労感。

……最後の一つは貧血と魔力の枯渇だろうか？

「生きて……るのね、私」

どうやら、遠坂家の魔術刻印は私を死なせる気が雀の涙もないようだ。

刻印が治療魔術を自動的に行使し、現在進行形で私の傷を癒している。

出血、感染症を防ぐためにまず外側を治したものの、まだ中が終わっていないようだ。

おかげで私の魔力も殆ど治療に回され、目を覚ましているのがやっとな状態。

当主を助けようと躍起になるのは結構だが、もう少しペース配分というものを考えて欲しい。

そして、ふと自分を回収した人は誰なのだろうか、と考えた時。

「……目を覚ましたようですね」

障子が開き、冷たい外気が中に入り込む。

それと同じくして人が入り口に立つ。

その体のつくりは女性でありながら、モデル並、否それ以上の身長があり、足元に長い影を作っていた。

そして容姿は黒を主体とし縁に紫をあつらえたボディコンを身に纏い、両目を紫の眼帯で覆い、足元まで伸びた薄紫の髪という出で立ちである。

それに付け加えて異国の顔つきであるため、一般人が見たら怖がり、不審者扱いになるだろう。

でも、私は彼女のことをそれ以上に知っていた。

彼女の名はライダー。

桜のサーヴァントでありながら一時的に私たちの味方となり、桜を救う殺す際にも洞窟に同行した英霊だった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第二話（後書き）

閲覧、ありがとうございます。

前更新から幾つ経ってんだか。  
やっそこさの更新です。

……こんな内容で大丈夫か？

前書きは基本書かない性分なので、後書きでつらつら書いていこう  
かと思います。

何かありましたら前書きを使おうかと。

一応第三話の構想は立っていますが、如何せん書くのに時間ががが……  
もう一、二話ほど凜・ライダーsideが続く予定です。

それでは、また次回の更新にて。

……こんな内容で大丈夫か？  
大事な事なので二度言い（ry

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0943v/>

---

～第五次聖杯戦争後日録～

2011年10月10日11時14分発行